

北方領土ゼミナールに参加して

長野大学 企画情報学部 藤本稜

1. 北方領土ゼミナールに参加する前に

まず北海道に行ったことのない自分にとって、北方領土が自国の領土という認識はあったものの、身近な存在になかった。そもそも学校教育の過程で詳しく学ぶことはないと思言していいと思う。もちろん北方領土問題だけではなく、竹島や尖閣諸島などの問題も含まれる。歴史的事実、実効支配されている現状を深く学ぶ機会がない現状では、領土問題が身近な問題になるわけがないと思った。自分自身、北方領土問題に興味があったものの、詳しく調べるための資料が少なかった。また、日本の主張のみでロシア側の主張や立場、現状のことを書いてある本に出会うことはなかった。全国民が歴史的背景を知らない、いつだれがなぜ実効支配が始まったのかわからない状況で今後の返還活動を続けていくのは難しいのではないかという印象を持っていた。

2. ゼミナールに参加して

根室中標津空港に降り立ち、バスで根室市まで移動した。初の北海道ということもあり、慣れない景色に感動したことを覚えている。ホテルに着き、夕食まで時間があり小腹が空いていたので近くのスーパーへ行った。北海道らしい野菜や海産物もあったが、ロシアからの輸入品が多くあった印象を受けた。スーパーでロシア産の食品を目にすることがないためロシアとの身近さというものを感じた。また、道路標識やホテルの案内にロシア語で書かれているものが多くあった。これも根室という街の特徴であり驚いたことである。

夕食後に同室の人と近くの居酒屋に行った。そこには多くの海鮮物があり、中には歯舞産や北方四島産の海産物が多くあった。ほっき貝やつぶ貝、メンメなど大きく脂がのっており、長野で食べることのできない料理の数々だった。地域の特産品と言えるものの豊富さは目を見張るものだった。北方四島産のものを食べ、北方領土の海産資源を身に染みて分かった。また、その居酒屋のお客さんと話す機会があり、何をしに来たのか根掘り葉掘り聞かれた。「北方領土のこと考えてくれてありがとな。」と言われたひとことに深さがあった。地元の人も全然返ってこない北方領土にどこか諦めを醸し出している一言だった。長引いている北方領土問題の現状を表していると思う。

納沙布岬を訪れた際、北方領土の近さが印象的だった。目の前はロシアに実効支配されていて、海の上の見えない線を越えてしまうと拿捕されてしまうという恐怖があることを実感した。望郷の家の二階で見学していた際、望遠鏡で船を覗きながら漁船と連絡を取っている人もいた。日々の暮らしのという日常に恐怖があるという違和感とともに、これが領土問題かと身に染みた。北方領土についてあまり実感がなかった自分にとってこれほど実感が湧くものはなかった。近くの売店には大量拿捕された時の実物の写真や新聞記事が展示さ

れていた。実際の写真や新聞が見れたのはいい経験だった。窓から見える風景と照らし合わせて、当時の様子を感じることができた。

小さいころから北方領土のことは耳にしていた。昆布や貝類をはじめとする漁業が盛んなことも知っていた。しかし、心のどこかで別に北方領土の海産物なくても他の土地でとれるし、こだわる必要はないのではないかと考えた時もあった。今後、そう考えることはないだろう。元島民や地元の方の話を聞き、返還は絶対してもらわないといけない。北海道・北方領土の海産物を守らないといけない。漁業という文化を守らないといけないと強く思った。「北方領土問題」という普段話すことのない内容を同世代の人たちと話すことができ、刺激をもらうことができた。この話題について少しでも関心があり知識がある友達がいないうという現状がある。そんな友達に話しても「何を言ってるの？」で終わってしまう。北方領土問題について意見できる場があり、学べる場ができたことに感謝しないといけないと思った。

3. 今後の活動について

今後、自分は少しでも領土問題について関心を持ってもらえるように活動していきたいと思っている。知識や関心がない人がいる現状がある理由として今まで生きてきて、深く学べる機会がなかったからである。小学校、中学校、高等学校と学ぶ場がないからだと思う。政治問題など友達と話すことはある。選挙の話や法律の話、外交の話などである。いずれも小学校、中学校、高等学校のどれかで学んだことがあるという共通点があるのではないだろうか。知識がないと話すとすらすらできない。北方領土問題についても学ぶ機会を義務化するべきだと思った。北方領土問題は、地元の人や北海道の人、政治家の問題だけではない。自分たちの国の問題という意識改革をするべきだと思う。自分一人だけではそんな力はない。でも近くの人に経験を伝えることはできる、そういった行動を起こすことが大切であると思った。

今、小学生でもわかるような資料作りをしている。誰でもわかる資料があることで北方領土問題について興味関心、知識を深める第一歩につながると考えているからである。小学生にはまだ早いといった声もあるかもしれないが、自分にとってはあまり関係ないように思える。ゲームやドラマなどのテレビ番組が話の話題にしやすい理由として、ハードルの低さがある。見たりやったりしていなくても内容くらいは知っているという情報の入手のしやすさがハードルの低さにつながっているのだろう。知るといふ第一歩が重要なのである。一步のハードルを越えてくれれば二歩、三歩のハードルは低くなる。ハードルを低くすることで話の話題として使えるようになるのだ。そうした環境づくりをしていきたいと考えている。将来、北方領土について全国民がある程度の知識をもって返還活動をできることを目標にしている。